日本語のために

丸谷才一

日本語のために

丸谷才一

新潮社

日本語のために
著者／丸谷才一（まるやさいいち）
●
発行／昭和49年8月30日
25刷／昭和53年11月5日
発行者／佐藤亮一
発行所／株式会社新潮社
郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808
電話・業務部03(266)5111・編集部03(266)5411
●
印刷所／中央精版印刷株式会社
製本所／新宿加藤製本株式会社
●
定価／750円
© Saiichi Maruya Printed in Japan, 1974
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

日本語のために■目次

I
国語教科書批判 9
1 子供に詩を作らせるな 9
2 よい詩を読ませよう 14
3 中学生に恋愛詩を 20
4 文体を大事にしよう 25
5 子供の文章はのせるな 30
6 小学生にも文語文を 35
7 中学で漢文の初歩を 40
8 敬語は普遍的なもの 45
9 文学づくのはよさう 50
10 文部省にへつらふな 55
II
未来の日本語のために 63
現在の日本語のために 85

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

III

当節言葉づかひ 101

1 総理大臣の散文 101
2 娘たち 110
3 片仮名とローマ字で 120
4 江戸明渡し 129
5 敬語はむづかしい 138
6 電話の日本語 147
7 泣虫新聞 157
8 テレビとラジオ 165
9 最初の文体 174
10 タブーと言霊 183
11 字体の問題 192
12 日本語への関心 201

あとがき 210
初出一覧 214

装幀■辰巳四郎

日本語のために

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

国語教科書批判

1　子供に詩を作らせるな

一体どうして、子供に詩を作らせることにこんなに熱心なのだらう。これではまるで詩学教科書ではないか。

小学校の教科書に目を通して、まづさう思つた。これはおそらくわたし一人の感想ではあるまい。誰だつて怪訝に思ふくらゐ、異様な熱中ぶりを示してゐるのである。もつとも、詩学教科書と言つたのはほんのお世辞にすぎないので、あからさまに言へば、詩でも何でもないまことに詰らぬものを子供に書かせようとして必死になつてゐるのが、国語教科書の現状なのだ。

たとへば東京書籍の『新しい国語』五上に「四　詩を書く」といふ単元があつて、小学生が、

牛が水を飲んでいる。
大きな顔をバケツの中につっこんで、ごくごくごく、がぶがぶ、でっかいはらを波打たせて、ひと息に飲んでしまった。

と書いたのを、次のやうに直すといふ実例をあげてゐる。「書こうとすることがらを、いっそうきわだたせるためには、このように、改行のしかたや句とう点の打ち方など、書き表わし方のくふうをすることがたいせつである」

牛が水を飲んでいる。
大きな顔を
バケツの中につっこんで、
ごくごくごく、
がぶがぶ、

でっかいはらを波打たせて、
ひと息に飲んでしまった。

『牛』といふ「詩」がこれでよくなつたつもりらしいが、果してさうなのか。わたしの見たところでは、改作前も改作後もどちらも詩ではないし、単なる文章としては（別にどうと言ふことはない代物だけれど）、手を入れないうちのほうが数等すぐれてゐる。詩でなんかちつともないスケッチをいい加減に改行して、詩らしく見せかけようといふ卑しい魂胆のないところが、まだしも清潔なのだ。

かういふ「詩」の作り方の実演（本当は虚演なのだらうけれど）はほかの教科書にもあつて、教育出版の『標準国語』五年下では、「えん筆でざくろをつぶすと、／ピンク色のしるが飛んで出た」といふ二行を、「えん筆で／ざくろをプチュとつぶす。／ピンクのしるの水鉄ぽう」といふ三行に改め、「どんなところをうまくくふうしているか、前に作ったものと比べてみましょう」などと指図してゐる。どちらも詩ではない点でも、改作後のほうが悪くなつてゐる点でも、前の場合とまつたく同様なことは言ふまでもない。かういふ馬鹿げた教材を扱はなければならない教師たち、かういふ下らない勉強に頭を悩ましてゐる児童たちに、わたしは同情を禁じ得なかつた。

第一、不思議でならないのだが、なぜ子供に無理やり詩を作らせるのか。そんな特殊な勉強がどうして必要なのか。いくら考へても合点がゆかないのである。

もちろん、作文の練習といふのは大事だらう。これにはじゆうぶん時間をかけて、丁寧な指導を受けることが望ましい。字も覚えるし、言葉や言ひまはしの意味もはつきりするし、筋道を立てた表現のし方も身について、いいことづくめだからである。しかしこれとても、上手になるに越したことはないが、何もみんなをいはゆる名文家に仕立てようと骨を折ることはない。誤字脱字がなくて、語法の正しい、達意の文章が書ければ、それでいちおう上出来なのだ。しかし、散文の場合ならば達意の文章といふことはある。詩の場合には達意の詩なんてものはない。

詩は言葉の魔法である。「力をも入れずして天つちを動かす」技術である。さういふ玄妙なものを書ける子供が滅多にゐるはずがないのは、明らかではないか。それなのに詩を書けとあらゆる子供に強制するとは、幼児虐待もいいところではないか。そして彼らがやむを得ず書いた、本当は詩でも何でもないものを詩として扱ふのは、詩についての間違つた概念を教へこみ叩きこむ、まさに犯罪的行為ではないか。わたしはこのことを日本の教育のために悲しみ、日本の詩のために憂へる者である。

子供たちに詩の作り方など教へる必要はない。もちろん、文章がきちんと書ける子供な

ら、優れた詩をたくさん読ませれば、ごく自然に、詩の眞似ごとのやうなものを書くことはあり得る。それはそれで結構である。そのなかには本ものの詩を書く子供もごくまれに出るかもしれない。まことに結構な話だ。しかし百万人に一人の天才を得るために、日本中のあらゆる子供に対し、インチキきはまる詩の作り方を教へねばならぬ道理があらうか。わたしにはこれが、時間と労力のまつたくの無駄づかひのやうにしか思へない。これを礼儀正しく言へば、今の日本の国語教育は文学趣味に毒されてゐるといふことにならうか。文学的、あまりに文学的といふことにならうか。

しかし、国語教育と文学との結びつきは、本来こんなところにあるのではない。それは国語の正しい習得に役立つといふ一点において、文学に資することができるのである。三文の値打ちもない文学趣味はさつさとよすがよからう。まさかヘッポコ詩人の卵を作ることが国語教育の目的ではないはずだ。

2　よい詩を読ませよう

子供に詩を書かせることは無用であるとわたしは言つた。しかし、詩を読ませることはすこぶる有意義だらう。詩において言葉は最も魅惑的に用ゐられてゐるはずだからである。

ここで一言ことわつておけば、詩が情操を養ひ、心の優しさを育てるといふことにわたしは反対しない。それはたしかに詩の大きな功徳である。しかし国語教育における教材としての詩の重要性は、まづ何よりも、日本語がこれほど力強く、鋭く、匂やかで、豊かで、一言にして言へば美しい言葉であることを、意識的、無意識的に感知させるといふ点にあらう。日本語の美しさについて、子供相手にながながと演説するなどは愚劣の極である。こむづかしい長広舌よりも一編の詩のほうが、そのことを遙かによく教へるだらう。もちろんそのためには、眞の詩を与へなければならないけれども。

ところが小学校の教科書に採録されてゐる詩について言へば、小首をかしげたくなるも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c